

## コンゴ伝道に見る異文化接触 [33]

半世紀になろうとするコンゴ伝道の歴史の中で、最も重要な人物と言えばノソング・アルフォンス氏であろう。1960年、南アフリカへの空路の途中コンゴに立ち寄った二代真柱を、偶然にも自身のタクシーに乗せたことがきっかけとなり、現在まで続く本教のコンゴ伝道が始まった。二代真柱はこの時のノソング氏の人柄に感激し、その2年後の1962年に同氏をおぢばへ招待した。ノソング氏は弟マユーマ氏との5ヶ月の日本での滞在の中で、天理教の教えに触れ、教理を学び、おさづけの理を拝戴した。そして信仰を続ける決心を固め、自ら願ひ出て神実様をコンゴへ持ち帰った。それは同時にコンゴの地に本教の道がついたことを意味する。

2002年4月、そのノソング氏は療養先のパリで亡くなった。彼が晩年パリに滞在したのは治療のためだった。父親の体の不調を聞いたパリ在住の子どもたちがフランスでの検査を勧め、1998年2月、彼はコンゴを発った。それから4年間、検査や入院、手術や治療を繰り返す闘病生活を送った。その一方で、会長としての職務を全うできないことで海外部（当時海外布教伝道部）とさまざまな意見が交わされ、紆余曲折を経て最終的には会長職の罷免という形でコンゴ伝道の一線から身を引くことになった。彼は劇的な一生を送ったのに違いない。遺体はコンゴに搬送され、家族や親族に見守られる中埋葬された。しかし、ノソング家とコンゴブラザビル教会との間に起こった複雑な問題から、教会で葬儀は行われていない。同氏の御霊も教会に祀られていない。それでも、本教のコンゴ伝道の歴史は彼なくしては語れない。

1975年4月、高井猶久3代会長の後を次いで、ノソング氏は4代会長に任命された。彼を会長に推挙するに当たっては、いろいろな意見が関係者から出された。「時期尚早」という意見が多かったが、中には「会長になる資質はない」という全面的に否定する意見もあったようだ。それでも最終的に会長に任命されたのは、「ノソングを喜ばしてやってくれ」という二代真柱の言葉に何としても応えたいという高井氏の強い思いがあったからだろう。また同氏は「いずれ自分が会長になるのだ」というノソング氏の無言の訴えを身近で感じていたのかもしれない。さらに当時、さまざまな組織の長が外国人（白人）からコンゴ人に移行する動きがあったという社会背景も、ノソング氏の会長就任への後押しとなった。

ノソング氏の人柄には相矛盾する側面がいろいろあった。教えに徹し信仰を貫くところもあれば、おつとめの時刻に大幅に遅れたり、出なかつたりすることもあった。また、コンゴにおける天理教の広がり、教会活動の活性化を気に掛けていた一方で、自らの商売には熱心に取り組んでいたところもあった。会食の席などでは、本当に陽気で楽しく、歌や踊りなどひょうきんな姿を見せ、周りの者たちを楽しませるのだが、教会内で名指しで人を責め立てることもままあった。あるいは、コンゴに在住する日本人の安全のために誠心誠意尽くす面もあれば、その日本人を海外部との交渉に際して「人質」のように扱うところもあった。コンゴ人を含め多くの人たちが「コンゴ人には珍しいタイプ」と彼を評する。私自身もコンゴブラザビル出張所に所員として勤めた3年余り、ノソング氏と間近で接した。確かに全てにおいて両極端な人だった印象を持っている。

しかし、そうした人だったからこそ二代真柱との出会いがあり、彼に「同志」を得たと思わせるだけの出会いができたのかもしれない。二代真柱の初めてのコンゴ訪問の際のノソング氏の徹底した親切ぶりは本誌ですでに紹介されているが、後年、シタ夫人にその時の夫の様子を聞いたことがある。それに対して夫人は「あの3日間は夫は別人のようでした」と述懐していた。また「案内している人は特別な人である」とノソング氏が興奮気味に言っていたという。ホテルの部屋になかったタオル類をスーパーで購入して届けたり、現地通貨を持っていなかったのでレストランの支払いが出来なかった真柱一行のために80キロの道のりを往復したり、あるいは3日間のタクシー代すら受け取ろうとしなかったという彼の行動は、夫人のこうした証言と呼応する。

その一方で、おぢばから派遣された日本人布教師との間では、さまざまな局面でトラブルがあった。「あの人さえ…」と思った日本人も多かったのではないだろうか。金銭に関わる問題も絶えなかった。私自身も出張所勤務時代に、会長から教会の会計、現金の管理を任されていた。教会費の支出は計画性に欠け、また私的ではないかと思われるような支出も少なくなかった。こちらは会長から言われるがままに出しているのに、現金が足りなくなってきた責めを受けることもあった。その都度支出の明細を見せて納得してもらわなければならない。もともと、納得してもらえたのは、私が日本人だったからだろう。殊にお金に関しては信用がないコンゴ人同志だったら、このようにはいかなかっただろう。出張所が閉鎖され、日本人が教会費を管理しなくなつてからは、会計報告すら出されることはなかった。否、出すことができなかつたに違いない。その後、教会青年のお与えも月によって金額が変わったり、払われなかつたりしたこともあったという。

会長に就任したノソング氏にとっていつも問題の種となつたのが、就任と同時に設置されたコンゴブラザビル出張所の存在である。出張所は海外部の出先機関であり、教会の「支配下」には置かれない。役割は教会活動のサポートであるが、それは会長にとっては本部からの監視と映っていたようだ。コンゴ社会において、一組織の長は絶対的な存在である。「ようやく長になれたのに…」会長の胸中にはそのような思いがあったことだろう。「会長と出張所長とどちらが上か」と彼はよく口にした。コンゴ社会に対して、教会に日本人が駐在することの重要性、また種々の教会活動における日本人の役割の必要性を重々承知しながらも、「長」としてその日本人を自身の「支配下」に置けないことに大きないらだちがあったようだ。

出張所を通じて海外部と数多くの話し合いがもたれた。会長としての勤め方、会計の問題、教会の活動に関することや教会の金銭的自立など、話し合いは必ずしも穏便に進められたわけではなかった。彼には自分の意に添わないようなことが起こると決まっていたという台詞があった。それは「自分をシェフにしたのは本部であり、私が望んだことではない」だった。しかし、同時に「コンゴに天理教の道をつけたのは私である」という言葉もよく繰り返した。海外部とのやりとりの中で発せられた彼の多くの訴えの裏には、コンゴ伝道が今もなお抱えている問題に通じるものがあるように思える。そしてそれは、天理教の海外伝道に対する問題提起でもあるのではないだろうか。